

「道教」は、中国古来の神仙思想や道家思想を主たる構成要素として、仏教・儒教から論理や倫理・世界観などの影響を受けながら歴史的に発展し、死からの超越と天界における永生を信仰する宗教である。現在でも、中国ほか華人社会で活発におこなわれている。日本道教学会は、その研究のために1950年に設立され、道教を主としながらも、中国の文化現象のほとんどすべてを包括している。構成人数は2018年現在、役員125人（男性108、女性17）、会員499人。会員の性質において、中国研究に従事する研究者以外の会員は非常に少ない。その主たる要因は、第一に日本では道教の信者はほとんど存在しないこと、対して中国および台湾・シンガポールほかの海外に大量に存在する道教信者は、本学会とほとんど関係を持っていないこと、第二、日本の一般市民にとって道教の宗教的文化的有効性が理解しにくい、などがある。

このような基本的状況に対して本学会は、宗教研究としてだけでなく、むしろ宗教文化史的研究の視野に立って、道教に関わる文化現象の多様性と創造性を探究している。私見では、「日本における学術の現状と課題」を説明して「広く国民と共有する」(G8通知)のために重要な側面として、次の諸点がある。①日本文化は古典中国文化を承けており、その古典中国文化において、道教は宗教思想として核心的であること。②日本に伝わった中国仏教は、道教の影響を受けた要素を持つこと。③日本の宗教としての神道および修験道は、道教の文化要素を備えていること。④いわゆる日本文化とみなされる文化要素には、道教からよってきたるものが少なからずあること。⑤道教文化の要素には、中国および華人社会を主として、日本・韓国・ベトナムで共有されているものが少なくないこと。

道教の解明を「広く国民と共有する」ためには、道教の信仰実践と文化要素のありようを、従来以上に具象的に研究者・市民に伝えていく必要があると思う。それにはとくに視覚化(visualization)を重視すべきである。とくにデジタル技術の発展により、映像と音声の採取、編集、字幕の加工、アーカイブ化などは、すでに私たち人文科学の研究者個人にも可能となっている。私自身の実践として2点を紹介したい。

第一は、中国現地での宗教活動・空間の視覚化とその解釈。これには、フィールドワークと映像収集がある。フィールドワークとして道教研究者は道教儀礼の映像化をおこなっているが、私自身は、道教聖地の景観や宗教施設などへのフィールドワークおよび可視化を考えている。映像収集としては、まず映像人類学の成果だけでなく、宗教活動を撮ったインディペンデント・ドキュメンタリーの収集・解釈・紹介である。中国では1990年代から20年来、民間のドキュメンタリストが社会の底辺や辺鄙な農村に入って、体制メディアや外国人が撮影しない宗教活動を記録している。

第二は、道教の視覚文化の研究。仏教学やキリスト教学の視覚文化研究にくらべ、道教の視覚文化は看過されてきた。しかし近年やと、関係する文化財が東アジア各地に存在することが認識されはじめた。これは上述の⑤の側面の解明と知の共有を促進する。また、ブレ道教の文化財の新出土も知的刺激がある。

最後に、より普遍的現代的な話題としては、環境問題へのアプローチがある。道教には、外なる自然と人間を合一させようとする思考方法がある。本学会では、2015年大会(東洋大学)で「エコ・フィロソフィ 自然・環境・道教」と題して講演会をおこなっている。自然環境を重視する日本の宗教思想(神道・日本仏教)と道教との関係の研究成果を中国に投げかえすことは、中国国内の環境問題の解釈に再帰的な示唆を与える可能性がある。